

助動詞「ごとし」確認テスト（比況） 解答・解説

■ 解答・解説

問1 ア（比況）。「かくのごとし（このようだ）」は、川の水のはかなさと同じだと人や住まいをたとえています。

問2 終止形。文の終わりにあり、言い切りの形「ごとし」になっています。

問3 比況。「春の夜の夢のようだ」と、おごる人のはかなさを夢にたとえています。

問4 夢（体言「夢」＋「の」）。体言＋格助詞「の」に接続しています。

問5 春の夜の夢のようだ（＝春の夜に見る夢のように、はかない）。

問6 ごとし。「風の前塵のごとし（風の前塵のようだ）」と言いかえられます。終止形なので「ごとし」です。

問7 連用形。「ごとく」で、後ろの「とどまる（とどまることなし）」へ続いています。

問8 連体形。「流るる」は動詞「流る」の連体形で、連体形＋「が」に接続しています。

問9 比況。「玉のように清らかだ」と、心を玉にたとえています。

問10 連体形。「ごとき」で、後ろの体言「白き花」を修飾しています。「ごとき＋体言」は連体形です。

問11 連体形。「飛ぶ」は動詞「飛ぶ」の連体形で、これに「が」が付いて「ごとし」へ続いています。

問12 例示。「梅や桜や桃のような（春に咲く）花」と、具体例をいくつか挙げて示しています。具体例を並べているときは例示です。

問13 梅や桜や桃のような花。（「～のような」と具体例を挙げる例示の訳にします。）

問14 光（体言「光」＋「の」）。体言＋「の」に付いています。

問15 （例）「ごとくに」は、連用形「ごとく」に助詞（または状態を表す「に」）が付いて、「～のように」と下の動詞へ続ける言い方です。「ごとくなり」も連用形「ごとく」に「なり」が付いた形です。

問16 (1) 比況 (2) 山のように高い波。

問17 あなたの恩は、海のように深い。

問18 連用形。「ごとく」で、後ろの「なり」へ続いています。「ごとくなり」の「ごとく」は連用形です。

問19 夢のようにはかない（あっけない）。

問20 ア＝ごとく／イ＝ごとく／ウ＝ごとし／エ＝ごとき。ク活用型で「ごとく・ごとく・ごとし・ごとき・〇・〇」と変化します（已然形・命令形はありません）。

問21 (1) ア (体言「玉」に「の」を介して接続) (2) イ (連体形「なき」+「が」に接続)。「ごとし」は〈体言・連体形+が／の〉または〈連体形〉に付きます。

問22 (例)「ごとし」は漢文訓読体や和漢混交文(『平家物語』など)で多く使われ、「やうなり」は和文(仮名の文章)でよく使われる、という違いがあります。(意味はどちらも比況「~のようだ」で共通します。)

問23 (例)比況は、あるものを別のものにたとえて「~のようだ」と言うときに使います(例:夢のごとし=夢のようだ)。例示は、「梅・桜のごとき花」のように具体例をいくつか挙げて「たとえば~のような」と示すときに使います。たとえているのか、例を挙げているのかで意味を見分けます。
